

ウクライナ危機の背景と今後の展望

平成国際大学 准教授 末澤恵美氏

今起きていることだけでもって、どっちが加害者でどっちが被害者だということになると、次にはそれが逆になるということが繰り返される。根っこにどういうことがあるのか、そこをしっかりと把握しておくことが大事だ。

2013年11月、ヤヌコービッチ大統領が予定されていたEU連合協定への署名をロシアの反対を受けて直前になって延期した。それに対する猛烈な抗議のデモのことがテレビ、特に、ネットで全土に知られることとなったとたん、いろんなことに不満を抱く人たちがどんどん加わってきて、デモの実態は何が何だか手が付けられない大混乱。たとえば、全然、職にありつけない若い世代の人たちがレーニン像を引き倒した。彼らはソ連崩壊後に育ってきた人たちで、いまだに旧体制が支配し続ける社会に対する不満を思いっきりデモにぶつけてきた。その反抗の圧力がヤヌコービッチ個人に向かっていって、日本のテレビでも報道された彼の豪邸や親族の贅沢三昧の様子が暴かれている映像である。

ウクライナは、歴史的にみて、ながい間、西からポーランド、東からロシアが来て分離支配された。宗教的にも独特で、9世紀にビザンチンの流れを汲むキリスト教が入ってきた。一方、西方からはローマン・カソリックの流れを汲むキリスト教が入ってきた。その混在する中で生まれてきたのがグレコ・カソリック。単純な親ヨーロッパ、親ロシアということとは微妙に違う。

1918年、いったん独立を獲得したが、1919年、ロシアに併合された。レーニン時代はあまり民族的な問題は起こらなかった。ところがスターリン時代になると、言語はロシア語に統一、宗教も制約する。農民の移動を禁止して、できた作物からの厳しい収奪を行って餓死者まで出る。特に、ウクライナ西部では、戦争でドイツに味方したということで弾圧を受け、強制的にシベリヤなどへ移住させられた。それがソ連崩壊で故郷に戻ってきたけれども、もとあった自分の土地や財産はない。そういうことがつい最近までの現実で、ロシアに対する反発は根強い。

彼らは、ソ連時代の悪夢から解放されて、ようやくウクライナ人として自分の国で生活することができるようになった人たちだ。ソ連崩壊、10年、15年たってウクライナ語の辞書なども編纂がすすんできて、ウクライナ語の書籍が並ぶようになった。ロシアの文化的、社会的な影響からの脱却の動きが強まってきて、公用語をウクライナ語に統一しようという政府の動きが始まる。

ところが、これが逆に、ロシア語を操る東部の人たちを刺激して、とうとうドネツク、ルハンスクの独立運動まで引き起こしてしまった。東部のドネツク、ルハンスクは何世紀もロシア帝国の支配下にあったので、ロシア語を話す人たち、ロシア文化を共有する人たち、すなわち、ロシア系住民がたくさん住んでいる。炭鉱としても有数の地域であり、ウクライナのGDPを稼ぐ主力産業が集積している工業地帯。その相手はロシア。そういう東部にとって、EUに近づこうとする中央政府に対しては、独立するしかない。それが東部の選択である。EUから引き離したいロシアがそれを援護する。

クリミアはウクライナの中で、自治共和国としてこれまで認められてきた。特に、セバストーポリは特別市で独立した行政単位になっていて、黒海艦隊の基地。そのクリミア自治共和国に対

してウクライナ政府が強い自治権を与えた。この一瞬をとらえて電撃的に併合を実行したのがプーチンだ。ロシアにとって黒海艦隊は重要な生命線である。プーチンは断固として行動を起こして、大方の見方を覆して見せた。ゴルバチョフ時代、秘密主義によって隠されていた事実が明らかになって、ロシアのものだったクリミアをウクライナの管轄にしたのはフルシチョフが勝手にやったことだと。これが、今回のウクライナ問題にも大義名分を与えている。

今回の大統領選で、ポロシェンコが大差をつけて当選した。完全にビジネスの人で、特別の軸があるわけではない。EU統合路線は続けること、東部の問題は話し合いで解決すること、武器を捨てれば恩赦をあたえること、テロリストとは交渉しないこと、ロシアとの妥協点を見出す努力をすることが、彼の公約である。プーチンは大統領選挙の結果を尊重するといっているが、鍵は、拮抗している中部の動きを彼がどう捕まえるかだと思う。彼が「中庸」を作り出すバランスが取れるかどうか、そこにかかっている。

今、プーチンが一番困るのは、東部の住民が暴走してテロリストというレッテルを貼られて、そのテロリストを応援しているロシアという構図になることだ。